

特別寄稿

東京外語大教授 中嶋 嶺 雄

二十世紀のシンボルであり、すくなくとも一九六〇年代半ば頃までは歴史的進歩の道標のように見なされていた社会主義は、いまや息絶え絶えになって喘いでいる。一九八九年後半にポーランド、ハンガリーから東ドイツ、チェコ、ブルガリアそして流血の惨事を伴ったとはいえずルーマニアにいたるまで一斉に爆発した自由化・民主化への欲求に明らかのように、社会主義諸国はいま内部から大きく変質しつつあり、共産党の一党独裁体制が相次いで崩れつつある。

崩壊相次ぐ共産党独裁

私がかねがね主張してきたところではあるが、社会主義は成熟した国家から次第に崩壊しはじめ、社会主義・共産主義の呪縛から離脱することがそこでの歴史の進歩となつて、これから二十一世紀にかけては、時計の針が左から右へと大きく逆回転



してゆくことであろう。

今回の東欧諸国の歴史的な変動は、そのことを如実に示したのである。私自身、去る九月にはチェコ

と東ドイツを訪れ、独裁的社会主義国家の最後の断面にふれたのだが、近い将来の変化が期待されていたとはいえ、かくも早くその時期が

ソ連、中国はどこへ行く

東欧の波紋、冷静に注視

ものに苦しめられ痛めつけられてきたからである。

だとすれば、今日の東欧の潮流は、いずれソ連や中国に波及してゆくものと私は考えている。ゴルバチョフ書記長自身、今回の東欧情勢の流動化を促した仕掛け人であるだけに、彼はたんにブレジネフ時代の「制限主権論」を行使して東欧の動きを抑えなかったのみならず、彼自身が内

ず、また、中国当局は、天安門事件を導いた民主化運動のなかに、

「中国東欧化」の危険を感じたがゆえに、これを軍事力によって徹底的に抑えつけたのだと言わねばならない。

ゴルバチョフ体制下のソ連は、ペレストロイカ(根本改革)とグラスノスチ(情報公開)によって、大きく変わりつつあるが、ソ連社会のシ



心では、いずれソ連も東欧の後追いをししてゆくであろうと想定しているのではない。

私は、東欧情勢が大きく動きつつあったこの十一月中下旬、右のような問題意識に支えられてソ連と中国を訪れた。ソ連でも中国でも東欧の動きに注目が集まっていたけれど

(但し中国では東欧の動きがほとんど報じられていない)、ますますソ連が、東欧化、することはあり得

STEM変換や経済の活性化はまだほとんど実現していない。

だから、ソ連市民は国内で少しも短くならない行列に並んでペレストロイカを見ているだけに、欧米や東欧でのようなゴルバチョフ人気はソ連には存在していない。

こうしてソ連は動こうにも動けず、また東欧のような脱共産化への急激な変化はしようにもなし得ず、またそれはぜひとも避けねばならな

いところであろう。ここにゴルバチョフ書記長のジレンマがあり、そうしたソ連の矛盾した半面は、あまりに早く社会主義世界全体が動いてほしくないという一点で、今日の激動に棹さしている中国への新たな親近感につながっている。

中国は、ポスト鄧小平時代を前にして、依然として戒厳令下にあり、天安門事件という悲劇的な代価を支払ったにもかかわらず、政治も社会も安定せず、経済にも暗雲が立ちこめていて、江沢民体制の基盤はきわめて脆弱あるように思われた。

衝撃のルーマニア政変

いずれ、中国にも東欧のような変動が生じるであろうし、そのときには中国も急激に変わるかもしれないが、当面は、一方で西側と交流しつつ、他方では中ソ関係、中朝関係、中蒙関係、中越関係を固めてアジア社会主義圏を死守しようとしている。このような中国にとって、東欧の盟友チャウシェスク体制下のルーマニアが劇的に民主化へと転じたことはきわめて大きな衝撃であろう。

わが国は、このようなソ連、中国の行方を見つめながら、自由世界の一員であることの大きな意味を堅持確認しつつ、冷静な立場で社会主義諸国の将来に対処すべきである。

【写真】崩壊した共産主義。その革命は、まるで津波のように襲った川やと市街戦が終息、笑顔を取り戻したプカレストの市民たち